

〔研究ノート〕

“会”の意味

白 木 通

- 一 はじめに
- 二 “会”についての従来の記述とその問題点
- 三 “会”と共起しうる〈動作〉
- 四 結 論

一 はじめに

従来，“会”を用いた可能表現は、大きく二つに分類されてきた。いわゆる「動作・行為の可能」と「可能性・蓋然性」である。

ここでは、「動作・行為の可能」を考察の対象とする。

また、動詞の表わす、動作・行為・変化・作用を、本稿では〈動作〉と称する。

二 “会”についての従来の記述とその問題点

動作・行為の可能を表わすとされる“会”は、従来次のように記述されてきた。

- ① 「“会”表示通过学习掌握一种技能」（北京語言学院新編『新中国語《基礎汉语課本》日本語版 2』’82.1）
- ② 「1. 懂得怎样做或有能力做某事。2. 善于做某事」（呂叔湘編『現代汉语

④ について

④の記述を②「学習を通じて身につけた」(“会”の意味)と、⑥「ある種の技能」(〈動作〉の内容)の二点に一応分離できるものとする。これは、“会”に後続する〈動作〉とこの「技能」の関係をあいまいにしたまま論を進めないため、あえてとった手続きである。例文を挙げて、②・⑥を検討する。

① 孩子会笑了。(『中国語』'91.1)

② 他(祥子)一天到晚只知道怎样把最后的力气放在手上脚上, 心中成了块空白。……

骆驼! 祥子的心一动, 忽然的他会思想了, 好像迷了路的人忽然找到一个熟识的标记, 把一切都极快的想了起来。(老舍『骆驼祥子』)

③ 黄瓜等类是会爬蔓子的植物。(萧红『呼兰河传』)

④ 人生来都会睡。

② “会”は「学習を通じて身につけた」ことを表わすのか

例文①・②の場合も、「学習を通じて身につけた」とは言い難いが、“了”によって、〈動作〉が身についたという変化が表わされており、そこに②のような解釈が入りこむ余地がまったくないとは言えない。しかし、③・④は生れつきの〈動作〉であって、②のような解釈の入りこむ余地はまったくない。はじめから「身につけている」のである。

また学習を通じて身につけたと推定される〈動作〉も、すでに修得し、その結果現在「身につけている」ことのみを述べるときは、

⑤ 他会游泳。

「身につけた」という未修得の状態から修得している状態への変化を明示するときは、次のようになる。

⑤ 他会游泳了。

以上にみたように，“会”そのものに「学習を通じて身につけた」という意味はなく、〈動作〉が「身につけている」ことを表わしているのみである。

⑤ 〈動作〉は「ある種の技能」か

「技能」とは、「芸芸を行う腕まえ」（『広辞苑』）、「物事を行う腕まえ」（小学館『国語大辞典』）、「掌握和运用专门技术的能力」（『現代汉语词典』）とある。これらの記述から、「技能」とは、「腕まえ」や「能力」であって、動作・行為そのものではない。従って、当然ながら“会”に後続する〈動作〉が、「技能」ではないということが確認できる。

更に、〈動作〉は『現代汉语词典』にあるように、「専門的技術」と言える動作・行為であろうか。①～④の例のように、そうとばかりは言えない。それどころか，“笑”，“思想”，“睡”は、技術的な動作・行為とも一般には言わない。ここにも問題がある。

ここで先に手続きとして分離した“会”の意味との関係をもう一度とらえなおしてみる。“会”に、「〈動作〉を行う技能がある」という意味があるのか。“笑”，“思想”，“睡”という〈動作〉を行うのに技能は不必要であろう。「“会”は〈動作〉を行う技能があることを表わす」と定義づけることは無理である。ただ、人間が、ある〈動作〉を意識的に身につける場面では、すべての〈動作〉を知的に理解し、身体的に訓練するという過程を通る。いわゆる「やり方が解って」、「身体も覚える」という二要素に分析できよう。意識的に身につけた〈動作〉——生来身につけていたのではない、ほとんどの〈動作〉——が、「身につけている」ということをあえて分析的に言えば、この二要素が身につけているとも言えよう。だがこれをもって身につけた〈動作〉を「技能」だと言うことはできない。

以上、④の検討を通じて，“会”は、「（動作主には〈動作〉が）身につけている」という意味を表わす、という結論が得られた。

㊤ について

㊤の記述は、すべて“会”の意味にかかわるものであり、㉞（〈動作〉を）どのように行うかが解っている、㊤（〈動作〉を行う）能力がある、㊤（〈動作〉を行うのが）上手だ、の三点に整理される。

この三点と、㉞の検討によって得られた“会”の意味「（動作主には〈動作〉が）身についている」との関係を考えながら、㊤を検討してみよう。

㉞・㊤について

㊤ 他会开汽车。

この㊤の例文は、㉞「彼は自動車の運転をどのように行うかが解っている」とも、㊤「彼は自動車の運転を行う能力がある」とも解釈できる。

ところで、自動車の説明書を読んで、運転の仕方を十分納得したとしても、㊤のように表現できない。実際に運転を修得してはじめて㊤のように“会”を使って表現するのである。また、彼が一定水準以上の知的能力・運動能力を備えていて、訓練すれば運転できる能力がある場合にも、㊤のように“会”を使って表現することはできない。やはり、彼がすでに運転を修得してはじめて、㊤のように表現することができるのである。

一般化して言えば、

「〈動作〉が身についている」

→㉞「どのように行うかが解っている」

「〈動作〉が身についている」

→㊤「行う能力がある」

上記は、無条件に成立するが、逆は成立しない。㉞・㊤の解釈は、situation, context によって「身についている」ことについての視点のおき方が変わることによって生ずるものと思われる。

㉞ 他原来会开汽车，但现在患了神经衰弱病，不能开了。

（彼は本来は自動車の運転の仕方が解っている——運転の心得があ

る——のだが、今ノイローゼにかかっている運転できない)

⑥” 他很能干，还会开汽车。我推荐他。

(彼は大変やり手で、それに自動車の運転もできる。私は彼を推薦します)

㊦について

では、「〈動作〉が身についている」と、㊦(〈動作〉を行うのが)上手だ、との関係はどうであろうか。これは日本語からも容易に類推できることである。

⑦ 他会说话。(彼は話すのが身についている → 口のきき方を心得ている → 話が上手だ)

⑧ 他会买东西。(彼は買物をするのが身についている → 買物の仕方を心得ている → 買物が上手だ)

ここで、従来の記述に明示されていなかった“会”の意味が明らかになってくる。すなわち、“会”と話者が口にするとき、そこにはすでに話者の判断が含まれているという単純な事実をあらためて確認する必要が生ずる。“〈動作主〉が、何らかの〈動作〉をする”ということを単に事実としてのみ述べるとき、“会”は用いられない(“他开汽车”)。話者が、その事実をふまえ、「〈動作主〉に〈動作〉が身についている」と判断して、はじめて“会”が用いられる(“他会开汽车”)。

つまり、㊦「上手だ」と“会”が解釈されるのは、誰しが行うと考えられる〈動作〉にあえて“会”を用いることによって、話者の判断を加えているためである。

ここには、社会的・文化的環境、社会的背景、場面・文脈における話者のコトガラに対するかかわり、あるいは判断・主張などが含まれている。例えば、ジャーナリストを評価して、「彼は英会話ができる」と言えば、相当の水準に達していると普通考えられるし、中学生ならば、ちょっとした日常会

話を思いうかべたりするものだ。

誰もが行くと考えられる〈動作〉にあえて“会”を使う場面でも、㊦「上手だ」に解釈されない場面がある。

第一に、〈動作〉の未修得の状態から修得された状態へと変化する場面であるが、この場合は、“会”が語気助詞“了”と共起することが多い。例文①「孩子会笑了」子供が笑顔をみせるようになったことをこのように表現する。

① 会说会笑。

①は、同じ“会笑”でも、人に接して愛想がよいことを表現しており、㊦の意味である。

⑨ 他会说话了。

⑨ 他会说话。

⑨は、口のきけなかった“他”が、口がきけるようになった事態を判断して、⑨は一般には話がうまいことを表現している。

第三に、例文③・④のような場合である。

③ 黄瓜等类是会爬蔓子的植物。

④ 人生来都会睡。

③・④のように生まれつき当然できることに“会”を用いて「身についている」と話者の判断を加えれば、そういうものだと言主張することになる。ただし、当然ながら次の例文⑩の場合は、㊦「上手だ」と解釈される。

⑩ 会睡觉才算会说会工作。

(睡眠がうまくとれてこそ仕事もできるというものだ)

以上、①、㊦の検討により得られた“会”の意味は次のようになると考える。

「(動作主には〈動作〉が)身についていると話者が判断した」ことを表わす。

三 “会” と共起しうる〈動作〉

このことについては、相原茂 (『中国語』'91.1)、岡部謙治 (『この中国語はなぜ誤りか』'90.9.10) の論及がある。以下これらをもとに、いわゆる〈動作〉について検討していく。

- ① 〈動作〉は、「『カタチの裏付けを伴う』ことと同時に『修得以前と以後の非連続性に支えられている』ことを要する」か

相原は、“会”の適用可能な〈動作〉を上記①のように限定し、この二点を同時に満足させられない〈動作〉を含むため、非文になるとする例を挙げている。以下この例を取り上げて検討する。

*⑪ 孩子会哭了。

*⑫ 孩子会睡了。

*⑬ 孩子会看了。

*⑭ 孩子会听了。

*⑮ 他会听中文广播。

*⑯ 他会看中文报¹⁾。

⑪～⑭は、人が乳幼児期に、動作・行為を身につけるという situation で、“孩子会爬了”“孩子会站了”“孩子会说话了”などの例文と同列において、非文の例とされている。子供は、ハイハイできるようになったり、立てるようになったり、口がきけるようになるのと同様、泣けるようになったり、眼がみえるようになったり、耳が聞こえるようになるわけではない。いずれも生まれつき備わっていることだからである。⑪～⑭が非文なのは、“哭”“睡”“看”“听”という〈動作〉のためではなく、まずこの situation のためである。

- ① “哭”，② “睡”は別の situation のもとでは“会”と共起する。

⑪ 女人（绝望了）连哭都不会了。（王安忆『荒山之恋』）

⑫ 人生来都会睡。

⑪は否定文であるが、“了”によって表わされる変化が生じる前は“会哭”の状態であったことを暗示している。⑫は特に説明の必要はない。

⑬・⑭は、相原は、生来の能力について言っているが、それは“看见”（眼がみえる），“听见”（耳が聞こえる）という、「動詞＋補語」構造で表わされる。⑬・⑭と同じ situation であれば当然非文である。

*⑬ 孩子会看见了。

*⑭ 孩子会听见了。

では“会”と“看见”・“听见”は共起しうるであろうか。生まれつき、あるいは病気などで眼がみえない、耳が聞こえなかった状態から、みえる、聞こえるようになった場合、この場合は situation としてはありうるが、次のように表現し、“会”は使えない。この点については後でふれる。

⑬” 这个人本来是个瞎子。现在治好了，能看见（看得见）了。

⑭” 这个人本来是个聋子。现在治好了，能听见（听得见）了。

⑮・⑯は、生まれつきの能力を問題にしたものではなく、外国語を聞いたり、読んだりすることを問題にしたものである。⑮・⑯の例文は非文ではないとする中国語話者もある。また中国語を理解できることを明確にするためには、⑮“能听”を“能听懂”に、⑯“能看”を“能看懂”にする方が適切だという中国語話者もある。⑰はよく言うことだと例挙された中国語話者もある。

⑰ 孩子会看报了。

また“看”“听”は一般に誰もがする〈動作〉であり、次のような場合、成立するが、前述したように「心得ている——上手だ」の意味に解釈される。

⑱ 他会看中国画儿。

⑲ 会说的不如会听的；会听的不如会看的。（浩然『艳阳天』）

以上のように、⑪～⑭は、まず場面として成立しない文であること、そして、“哭”、“睡”は場面によっては“会”と共起が可能であることがわかった。また、⑮・⑯は、非文か否かに疑問があり、すべて論拠とはなりえないものとする。また、例文②“思想”のような例のあることもつけ加えておく。

しかし、“会”に後続する〈動作〉が、相原の見解のように「カタチの裏付けを伴う」ことと同時に「修得以前と以後の非連続性に支えられている」ものが多いことはまちがいのないところである。それは、動作・行為が、もともと眼でたしかめられることが多いからである。そして、人間の場合、大部分の動作・行為は生まれつき身につけているものでなく、習得するものであり、そのときに、修得以前と以後の非連続性が存在するはずのものだからである。

㊦ “会”と共起しえない〈動作〉とその理由

相原は、「“会”は〈技能〉の初歩的な習得が果せばすぐに適用可能である」ことと、“很”や“真”などによる“会”の修飾が不可能な「典型的な〈技能型〉行為」のみに〈動作〉の範囲を限定するという前提の上に立って、「〈習得した技能の深淺〉を問題にする時は、もはや“会”ではなく“能”の登場となる」と述べている。

岡部は、「一定の程度、水準に達していて、そこまで〈できる〉という場合には“能”を用いる」と述べている。また「“会”は“很”のような程度副詞で修飾すると〈上手である〉〈得意である〉となる」と述べ、程度副詞による修飾が不可能な“会”と別扱いしている。

まず、両者ともに、“会”が使えない〈動作〉の可能を表わす文を検討する際、「上手だ」と解釈される“会”を、「習得している」と解釈される“会”と別物に扱っていることについて、筆者の考えを述べる。ここでこの問題を再度取り上げるのは、十分に習得している場合は“会”ではなく、“能”で

あるかのように考えるのは誤解であることを明らかにしたいためである。

結論から言えば、一、㊸、㊹で述べたように、「上手だ」すなわち、いわば「能力の程度が高い」と、“会”が解釈されるのは、誰しもが行うと考えられる〈動作〉にあえて“会”によって「身につけている」と判断を加えるためである。同じ〈動作〉でも、それが「上手だ」と解釈できるか、ただ「修得している」と解釈できるかは、situation, context における話者の主張によるものなのである。“说话”という〈動作〉を例にとってみよう。

- ㊸ 这孩子说话。
- ㊸' 这孩子说话了。
- ㊹ 这孩子会说话。
- ㊹' 这孩子会说话了。
- ㊺ 这孩子真会说话！
- ㊺' 这孩子真会说话了！

上記の例文㊸・㊸'には“会”による話者の判断はない。㊹・㊹'は、口をききはじめた乳幼児が〈動作主〉である場合と、何でもしゃべれるようになった子供が〈動作主〉の場合では、ニュアンスが異なってくる。前者の場合は、㊹ “口がきける”，㊹' “口がきけるようになった”，後者の場合、㊹ “口のきき方を心得ている——上手に話ができる”，㊹' “口のきき方を心得るようになった——上手に話ができるようになった” という意味で使われることが多いと思われる。㊺・㊺'は、口がうまいという意味である。

このように、“会”はどんなつたない〈動作〉しか身につけていないときにも適用可能であると同時に、相当にうまいときにも適用可能なのである。しかも、その判断は最終的には話者が下すものであり、あえて言えば、絶対的な客観的基準はないのである。「マンマ」と子供が言うようになったら、「口がきけるようになった」とするのが人情であろうが、「そんなもの口がきける部類に入らない」と判断することもできるのである。中国語学習者が、あいさつ程度の中国語ができるようになったとき、「我只会说一点汉语」と

言うのが常に適当であって、「我不会说汉语」が常に不適當であるとは言えない。situation と話者の判断・主張によってそれは決まるのである。

また、「技能の初歩的習得」と言っても、その基準ははっきりせず、そもそも程度を問題にするのは、“会”ではなく、“能”であるという主張だったはずである。“会”はやはり、二で得られた結論、「(動作主には〈動作〉が)身についている」と話者が判断した」ことを表わすという意味に限定してこそ、具体的な問題を合理的に説明しようと考える。

両者の例挙する例文を具体的に検討してみよう。

*23 他会游五百米。

*24 他一分钟会打七百个字。

23・24は、ともに「効率」を問題にしているのであって、“游”，“打字”という〈動作〉が身についているか否かを問題にしているのではない。

*25 他病全好了，会走路了。

病気によって一時的に実際の行為が妨げられたとしても、「身についている」歩行のやり方を忘れたわけではないので、“会走路了”とあらためて修得したようには言わない。しかし、例文②のように、“心中成了块空白”となり、頭を働かすことが、どういうことかをいったん忘れてしまい、またあらためて習得しなおしたのだと話者が判断した場合は、“会思想了”と言うことが可能である。

*26 你会抽牡丹牌香烟吗？

*27 你会喝啤酒吗？

*28 我会看了中国的报纸。

*29 这些汉字他都会写对了。

*30 现在他连北京方言都会听懂了。

26・27では、酒やタバコのあれやこれやをのむのまないは、嗜好や習慣的な意味で「身についている」か否かであり、〈動作〉が「身についている」か否かを問題にする“会”は用いられないのである。

⑳～㉓が非文であるのは、「基本的技能のクリア」の上に立って個別の問題を言うときは“会”は用いられないという理由によるものではない。以下はすべて成立する。

㉓ 我会看中国的报纸了。

㉔ 这些汉字他都会写。

㉕ 现在他连北京方言都会说。

問題の所在は、㉓“看了”（読んだ）、㉔“写对了”（正しく書いた）、㉕“听懂了”（聞いて理解した）にある。これらは、具体的な場面における一回かぎりの〈動作〉あるいは〈動作〉とその結果が、実際に生起したこと、あるいは生起したと想定することを表わしている。ある〈動作〉が「身についている」ことを言うのに、その〈動作〉が、時間的・空間的具体性をもつことはありえない。“会”は語彙的にも、瞬時に終って反復不可能の〈動作〉を表わす“死”“出发”“消灭”“来”“去”などと共起しえないし、文法的にも、動詞の態を表わす要素、動詞接尾辞“-了”“-着”“-过”，結果補語（先に述べた“看见”“听见”はこの例である）、方向補語、程度補語や、動量詞を構成要素とする〈動作〉とは共起しえない。ただし、“（小説家）就是会写出故事来的人呢”（小説家っていうのは、お話を創作することのできる人のことだよ）（映画「城南旧事」）のように、“写出来”が“創作する”という意味で、時空の制約を受けない場合は可能である。

*㉖ 他会教你们汉语。

*㉗ 你在明天的欢迎会上会唱歌吗？

*㉘ 你今天会游泳吗？

㉖“教汉语”という〈動作〉の対象に具体的な人間がいて、その集団を教えるのに、特に何かの〈動作〉を「身につけている」必要があるとは考えにくいと思われる。

㉗“明天的欢迎会上”，㉘“今天”という具体的な時間・場面の設定が、〈動作〉を具体的な時空のものに限定しているためである。

*③4 你会写一下汉字吗?

③4 你能写一下汉字吗? (ちょっと漢字を書いてみて下さいますか?)

③4は、「能+V+“一下”+O+吗?」で、相手を配慮して意向をたずねるかたちとなっている。〈動作〉が「身についている」ことを表わす“会”の入りこむ余地はまったくない。

③5 我会开小汽车, 不会开大汽车。

③6 我会用中文写信了。

③5・③6は非文として挙げられているが非文ではない。

四 結 論

以上みてきたように、“会”の意味は、「(動作主は〈動作〉が) 身についていると話者が判断した」ことを表わしている。基本的にはこれだけであり、「どのように行うかが解っている」、「(ある事を行う) 能力を持っている」、「(ある事を行うのが) 上手だ」等のニュアンスは、“会”の後続の〈動作〉、場面・文脈、話者の判断・主張によって、“会”の意味のある側面に焦点があたるためである。

従って、“会”に後続する〈動作〉は、語彙の意味において不適切なものはもちろん、時間・空間によって支配されるもの、瞬時に終ったり、変化そのものを表わす〈動作〉とは共起しえないのは言うまでもない。

[注]

1) 例文①⑥は、相原氏の記述では“能”の方を用いる」として“能”の例文が挙げられている。